様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１７１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７００８８

研究課題名（和文）丸山真男と戦後民主主義

研究課題名（英文）Maruyama Masao and postwar democracy

研究代表者
清水　靖久（Shimizu, Yasuhisa）

九州大学・比較社会文化研究科（研究院）・教授

研究者番号：００１７０９８６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,300,000円

研究成果の概要（和文）：この研究では、丸山真男の政治思想を戦後民主主義との関連で思想史的に解明してきた。丸山は、戦後民主主義は虚妄だったと論じられるようになった1964年、「大日本帝国の「実在」よりも戦後民主主義の「虚妄」の方に賭ける」と記した。丸山にとって大日本帝国は良心の自由を侵す超国家主義の体制だったが、それからの歴史的転換において人民主権の思想を選んでから、たえず民主化する「永久革命」として民主主義を説いてきた。戦後民主主義に「虚妄」の面があったことはよく知りながら、民主主義を日本社会に根づかせるための思想的営為を続けたが、大日本帝国を経験していない若い世代には伝わりにくかったことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In this historical study I have illuminated the political thought of Maruyama Masao in relation to Japanese postwar democracy. Maruyama wrote in 1964, when postwar democracy was criticized as a sham, "I bet on the sham of postwar democracy rather than the reality of the Empire of Greater Japan." The Empire had had been the regime of ultra-nationalism for him that violated freedom of conscience. After he finally chose the idea of sovereignty of the people in postwar Japan, he advocated democracy as "permanent revolution" that was eternal democratization. Admitting well that postwar democracy had an aspect of sham, he continued to make an intellectual effort to root democracy in Japanese society. However, his effort was not easily conveyed to the younger generation who had not experienced the Empire of Greater Japan.

研究分野：日本政治思想史

キーワード：丸山真男　戦後民主主義

１．研究開始当初の背景

近年の丸山真男研究は、民主主義の永久革命論者という晩年の自称に反して、自由主義者の面を主に論じてきたが、戦後民主主義者の面が未解明のまま残されていた。

２．研究の目的

日本における民主主義について深く思索した丸山真男の政治思想を歴史的に解明することが本研究の目的である。近年の丸山研究は、民主主義の永久革命論者という晩年の自称に反して、自由主義者の面を主に論じてきたが、戦後民主主義者の面が未解明のまま残されている。本研究は、コンピューターによる丸山の全著作の網羅的な分析と、丸山眞男文庫の草稿類などの新資料の活用によって、丸山の政治思想を戦後民主主義との関連で思想史的に研究する。日本での民主主義の困難をめぐる丸山の思索や民主主義への丸山の懐疑などに注目しながら、それゆえの丸山の民主主義思想の豊かさを示す。丸山と他の思想家との比較や他国の戦後民主主義との比較も試みる。

３．研究の方法

丸山の政治思想を戦後民主主義との関連で思想史的に研究するために、丸山と戦後民主主義との関係を前述の三時期に分け、毎年一つの時期に集中して解明していく。そのさい丸山の著述をコンピューターで網羅的に分析するが、そのためにデジタル・テキストの作成を進める。また、東京女子大学の丸山眞男文庫や東京大学の情報公開室などを訪ねて、丸山の著作や草稿などの資料を収集する。刊行資料はほぼ備えているが、『帝国大学新聞』『東京大学新聞』の復刻版を購入して活用する。そのようにして丸山自身の懐疑や葛藤、歴史的現実との緊張などを明らかにし、丸山の民主主義思想を把握する。他の思想家との比較や他国の戦後民主主義との比較も試みる。

４．研究成果

本研究は、丸山真男の政治思想を戦後民主主義との関連で思想史的に解明してきた。丸山は、戦後民主主義は虚妄だったと論じられるようになった 1964 年、「大日本帝国の「実在」よりも戦後民主主義の「虚妄」の方に賭ける」と記した。丸山にとって大日本帝国は良心の自由を侵す超国家主義の体制だったが、それからの歴史的転換において人民主権の思想を選んでから、たえず民主化する「永久革命」として民主主義を説いてきた。戦後民主主義に「虚妄」の面があったことはよく知りながら、民主主義を日本社会に根づかせるための思想的営為を続けたが、大日本帝国を経験していない若い世代には伝わりにくかったことを明らかにした。

ところで私は、そのような本研究の成果として、『丸山真男と戦後民主主義』の刊行を計画し、2016 年度の科学研究費補助金の研究成果公開促進費（学術図書）に応募し、４月の交付内定に向かって、完成原稿の完成度をさらに高めるように努めてきた。ところが科学研究費委員会の成果公開部会による４月１日付の「応募課題に対する所見」として、「十分に市販性があるものと思われる」との通知があり、「本件についてのご質問、ご照会には応じかねますので、ご了承ください」との附記があった。おそらくこの著書は「十分に市販性がある」と判断するので科研費では助成しないという意味だろうが、その判断は誤っていると思うし、それなら４月よりもっと早く通知してほしかったと思う。

それはともかく、本研究がどのような研究成果を生じつつあったか、その研究成果をどのように公開しようとしていたかを示したく、徒労に終わった研究成果公開促進費の計画調書から主な記述を下に引くことにする。本様式の〔作成上の注意〕にも「学術研究においては当初予期していないことが起こることがあるため、研究開始当初に予期していなかった事象が起きた場合には、そこから得られたことも記述すること」とあるが、まさに「予期していないこと」が起きたわけであり、そこから得られたことも記述したい。

≪刊行物の内容（概要）≫

本書は、戦後民主主義との関連で丸山真男を政治思想史的に研究する学術図書である。丸山真男（1914-1996 年）は、戦後日本の代表的な政治学者で思想史家であり、戦後民主主義に関する理論的指導者とみなされてきた。1964 年には「戦後民主主義の「虚妄」の方に賭ける」と書いたし、1989 年にも「戦後民主主義の原点」として人民主権を論じた。しかし 1946 年に人民主権の思想に「転向」したのは戦後半年間も思い悩んでからだったし、1968-69 年の東大紛争では直接民主主義の学生運動に批判的だった。そのような丸山の思想の軌跡を明らかにしながら、民主主義について、戦後日本について、米国との関係について、大学と学問について、丸山の日本思想史研究について考察するのが本書の主な内容である。

丸山は、第二次大戦後初めて正しいことになった民主主義を日本に根づかせるためにも日本思想史を研究し、民主主義を阻む日本思想の伝統（「原型」「古層」「執拗低音」）を克服する課題を学問的に探究した。その探究は、米国のリベラル派の学者や財団とも共鳴しながら 1960 年代を通じて進められたが、1968-69 年の東大紛争と戦後民主主義をめぐ

る混乱を経て、結局どこに辿り着いたのだろうか。きわめて傑出した知性が日本の思想的伝統に挑戦した結果に関して、これまでの数多い丸山研究がほとんど答えなかったこの問いに、本書は答えを出そうとする。

丸山の日本思想史研究についてだけでなく、政治哲学についても、本書は論じる。丸山は、民主主義について「「人民の支配」という逆説を本質的に内包した思想」だと述べたように、民主主義の矛盾や困難を認識しながら、戦後日本の民主主義に賭けようとした。民主主義とは何か、自由主義や非暴力思想との関係如何、日本の戦後をどう評価するかなど、丸山の政治思想から学べることを示すとともに、丸山がどこで行き詰ったのかをも明らかにする。とくに 1960 年代の思想史のなかで丸山を論じることによって、戦後民主主義の矛盾と可能性を体現したような学者の五十歳代の知的格闘の跡についても考える。

本書は、それらの課題を意識しながら私が研究し発表してきた「丸山真男と戦後民主主義」に関する論文を加筆修正し、一書にまとめなおしたものである。本書の刊行は、戦後日本における丸山の政治思想の意義と問題を全体として明らかにするであろう。（丸山の名前は近年「眞男」と表されるのが常となったが、本書では 1960-80 年代に『日本の思想』『戦中と戦後の間』『後衛の位置から』に記された「真男」を用いる。）

≪目次（項目を列挙してください。）≫

まえがき
第１章　丸山真男、戦後民主主義以前
第２章　丸山真男と米国
第３章　政治学と教養
第４章　丸山真男の秩序構想
第５章　東大紛争と戦後民主主義
第６章　銀杏並木の向こうのジャングル
第７章　戦後民主主義の原点：人民主権
第８章　丸山真男と戦後民主主義
あとがき

≪刊行の目的及び意義≫

丸山真男という戦後日本の代表的な学者のみならず思想家について、戦後民主主義との関連で政治思想史的に研究した成果を公開して世に問うことが本書刊行の目的である。民主主義、日本の戦後、米国との関係、大学と学問、丸山の日本思想史研究など、現代日本でも重要な問題についての丸山の思想を考察し、思想史的研究として提示する本書刊行の意義は大きい。

本書の各章の論文は、私が 2005-08 年度および 2013-15 年度に科学研究費補助金（基盤研究Ｃ）を受けて約十年間、丸山真男について研究してきた成果であり、それを加筆修正のうえ一書にまとめることによって、科研費の成果をさらに示すことができる。実は各論文の多くは大学の紀要に発表したものであり、その試論的な性格ゆえに少数の研究者にしか抜刷を配布せず、Web でオープンアクセスにもしていないので、広くは知られていない。しかし各論文の読者からは高く評価され、研究の全貌を示すことを強く要望されてきたので、本書の刊行によって研究成果を広く公開する意義はきわめて大きい。

≪本刊行物を当該年度に刊行する意義≫

日本の首相が戦後体制からの脱却を唱え、それに対して学生たちが民主主義って何だと問いかけている現在からして、2016 年度も戦後民主主義や丸山の思想への関心が高まると予想されるが、その関心に応える本書を当該年度に刊行する学術的意義は大きい。しかも 2016 年度は丸山没後 20 年めであり、丸山に関する催事の増加などで関心がさらに高まるであろうことも、当該年度に本書を刊行する意義を大きくする。

もし本書の刊行が翌年度になれば、本書への反響はそれだけ少なくなるであろうから、やっと完成した研究成果を少しでも早く公開して広く知ってもらいたい。

≪本刊行物が学術の国際交流に対して果たす役割≫

戦後日本の代表的な政治学者で思想史家の丸山真男は、国際的によく知られており、その思想史的研究への関心も強い。とくに本書は、米国の知的財団的動向との関連からも丸山の日本思想史研究を考察し、また『万国公法』など日本の民主主義の思想史における中国経由的要因にも注目しているので、米中その他の諸国の研究者の興味も引くと思われる。

本書を刊行したら、一部分でも英語あるいは中国語に翻訳して、学術交流に役立てたい。私自身も本書の成果を携えて米欧諸国やアジア諸国の研究機関を訪問し、学術の国際交流を果たしたい。

≪科研費を必要とする理由≫

本書は、高度に専門的な内容の学術図書であるため、市販性が十分にあるとは思えない。それゆえ発行部数が少数になり、出版費用が高額になるので、それを自己負担することは困難である。もし科研費を受けられなければ、出版を断念せざるをえないであろうから、切実に科研費を必要とする。

2013-15 年度の科研費（基盤研究Ｃ）の研究課題「丸山真男と戦後民主主義」については、哲学分野のなかの思想史（政治思想史）という専門分野で応募して採択され、研究成果を上げてきたので、その成果の公開に対しても科研費で助成していただきたく、そのことからも科研費を必要とする。

上のような計画調書によって研究成果の公開を計画したが、「十分に市販性がある」という判断によって、残念ながら頓挫した。まさに「予期していないこと」が起きたわけであり、実にがっくりし、４月から５月にかけて立ち直れなかった。それでも挫けないで、別の研究成果公開のしかたを模索するという決意をやっと得た。遠からず『丸山真男と戦後民主主義』を刊行して、研究成果を世に

問いたいと思う。
　それ以外の研究成果は、下の発表論文などで公開してきた。

５．主な発表論文等（研究代表者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）
①清水靖久、さまざまな不服従、東大闘争と原発事故、緑風出版、2013 年、95-157 頁

②清水靖久、東大紛争と戦後民主主義、丸山眞男手帖、69 号、2014 年、275-282 頁

③清水靖久、銀杏並木の向こうのジャングル、現代思想、42 巻 11 号、2014 年、200-219 頁
DOI 40020266757(NAID)

④清水靖久、民主主義の思想史の首頁『万国公法』、地球社会統合科学、22 巻 1 号、2015 年、39-51 頁
DOI 40020561896(NAID)

〔学会発表〕（計２件）
①清水靖久、丸山真男と民主主義のディレンマ、Conference on Maruyama Masao、2013.7.4、The Asan Institute for Policy Studies, Seoul, Korea

②清水靖久、東大紛争と丸山真男、戦後日本思想の総合的研究会、2014.12.26、同志社大学人文科学研究所

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）
○取得状況（計０件）

〔その他〕

６．研究組織

(1)研究代表者
清水靖久（Shimizu, Yasuhisa）
九州大学・大学院比較社会文化研究院・教授
　研究者番号：００１７０９８６

(2)研究分担者　いない
(3)連携研究者　いない